

長崎県地学会

鎌田 泰彦

長崎県地学会は、昭和36年9月24日に、日本地質学会西日本支部の例会が、長崎において初めて開催されたのを契機に発足した。当初、12名の発起人によって設立が計画されたが、この日の創立総会には25名の有志が参集した。

現在の会員は280名を数えるが、この中には県外の会員が55名もあり、全体の約20%を占めている。会員の構成としては、小中高の教員が52%で最も多く、次いで、会社18%、大学・研究所10%、官庁・役所8%となり、残りの12%が自営や主婦の方がたで、医師や税理士も含まれている。

本会の活動として、発足当初から望まれたのは、地質巡検の実施であり、「日曜地質巡検会」として、年間5～6回の割で開催してきた。巡検地は大むね県の本土地域であるが、時には佐賀県や熊本県の天草にも足を伸ばしたこともある。この地質巡検会は、昭和62年9月には134回目となった。

第100回記念の巡検会は、昭和54年4月29日に、国指定の天然記念物の七釜鍾乳洞で行い、石灰藻化石の権威である立教大学名誉教授の故石島涉博士を招き、特別講演と石灰藻化石の産状の現地指導を受けた。この日の参会者は75名にも及んだ。

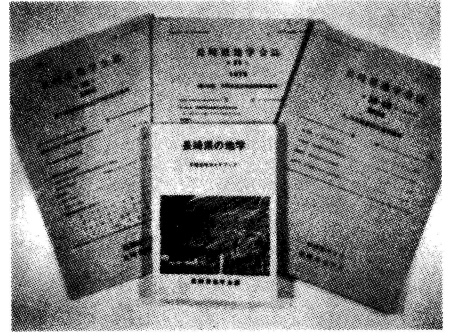
同年8月11～16日には、海外研修旅行を大韓民国で行い、21名の会員が参加した。この地質巡検では、主として江原道の先カンブリア代の片麻岩やオルドビス紀の三葉虫などの

標本を、自分達の手で採集する機会に恵まれた。

毎年6月下旬には、長崎大学を会場として研究発表会と総会を行っているが、昭和56年度には、文化の日に創立20年記念大会を開催した。この時は、会員の研究発表と、京都大学阿蘇火山研究所の久保寺章教授の「長崎県の地震について」の記念講演があった。また、この総会から、動続20年会員を表彰することになり、創立以来の会員の21名に対し、会のシンボルマークをあしらった記念バッジが贈られた。会則で、70歳を超えた20年会員は特別会員として推挙し、会費の納入が免除されることになっている。

これより10年遡って、創立10周年の記念事業として、「長崎県の地学—日曜巡検ガイドブック」を出版した。これは、その時までに行った日曜地質巡検会の記事を土台とし、県内50、県外3か所の地質案内を、B6版、195ページにまとめたものである。各地域ごとに2～3ページの解説が要領よく書かれており、3,000部ずつ3版まで印刷した。その後、露頭の状態の変化も生じてきたため、廃刊となった。

定期刊行物としては、年2回発行される「長崎県地学会誌」があり、現在までに45号まで刊行されている。内容には、研究報告、地学教育・教材研究、日曜地質巡検会記事、海外報告、文献抄録などが含まれている。会誌の特集号としては、金星日面通過100年記念(22号)、長崎県下の新露頭の研究特集(23号)、第100回日曜地質巡検会記念(31号)、海外地質



巡検会—大韓民国特集(32号)などを発刊した。とくに、昭和57年7月23日の長崎豪雨災害の発生の際には、記録写真、調査報告、災害体験記、文献目録を盛った「7・23長崎豪雨災害特集号」(39・40号)を発刊して、広く一般にも頒布した。

最近の活動としては、長崎県教育委員会が計画した自然史資料の収集のうち、緊急を要する地学系資料の収集については、県の要請によって本会が全面的に協力した。昭和59年度には、島原半島の加津佐町津波見海岸の口之津層群に含まれるシカ類を主とする脊椎動物化石層の発掘を5日間行い、60名(延194名)の会員が参加した。その結果、シカの頭骨と角や、アカシゾウの臼歯の破片などを採集することができた。60年度には、長崎市港外の伊王島町において、沖ノ島貝化石群の採集を2日間行い、延20名が参加した。この他、61年にかけて、九州最古の5億年岩石である野母崎町の変はんれい岩、琴海町村松の松が追鉦山跡の紅簾片岩やマンガン鉱、五島奈留島の双子水晶(日本式双晶)などの収集を行い、長崎県文化課の分室標本室に収蔵することができた。

(かまだ・やすひこ/長崎県地学会会長)

(転載承認済)